

せたかむい

古平町役場総務課
842-2181(代)
平成19年8月1日

年表で読む 古平の歴史

[120]

商工業 ⑦

◆醸造業 続く

明治二四年頃(一八九二)、新潟県三島郡出雲崎町から移住して来た

本間録郎に遅れて明治二五年頃、同じ新潟県三島郡から移住して来た九須美正助は、浜町で酒醸造業をしていた武川権七の工場を引受け、新たに『清亀』と名づけて清酒を販売した。

利用して清酒醸造場を設置したが、水質が悪いことから別の湧水を使用して、『清酒清泉』『福正宗』『千登勢』などを販売したが売れ行きは順調で、次第に工場を増築し生産を伸ばしていった。『千登勢』は最も高価で一升七五銭であった。

明治二六年、新地町で廻船、米穀海産商を営む△鎌田金蔵が酒醸造鎌田支店を置いて、『清酒しら梅』『千代櫻』を販売したが、明治二八年焼失した。すぐに場所を移して再建し、清酒のほかみそ・しょうゆも醸造して販売をした。

明治三六年、大阪で開催された第五回内国勧業博覧会では、本間禮太郎(二代目)の出品した清酒が褒状を受けた。

明治三二年の古平郡の酒類醸造高は九六五石余りであったが、翌明治三三年の醸造高は八四五石余り(清酒八一四石余り、濁酒三二石、焼酎五斗六升)と減ったが、明治三二

年には五戸で一、〇九五石を醸造しこれらは郡内で消費されていた。

(一石は一升瓶に換算して一〇〇本)

明治三四年、小樽区高嶋外五郡酒類品評会に出品した『しら梅』は優等二等賞を授与され、また明治三五年、北海道十一州連合酒類品評会では『しら梅』は一等賞、『千代櫻』は二等賞を授与された。

この年、鎌田金蔵は余市外二郡酒造組合部長に選出された。

明治四三年の清酒醸造高は、二戸(本間禮太郎・鎌田金蔵)で一、〇五〇石、金額は四七、三五〇円であった。翌四四年には、小樽から九四石を移入している。

町内では次第に商店が軒を並べて市街地を形成し、商店もまた販売競争をするようになり、盛んに店



頭に広告を出したり、各戸にチラシを配布する商店もあった。季節により売り出しが行われ、福引きや福袋などに人気があり、盆や正月にはお得意さんいろいろな景品などを配付した。(次ページに掲載)

明治四五年、小樽区外七郡酒造組合主催の、小樽商工会議所で開催された第二回北海道清酒品評会には二一五点の出品があつたが、古平から次のように入選した。

一等賞『金鶏』 鎌田金蔵
同『王冠』 同
三等賞『白梅』 同
四等賞『清泉』 本間禮太郎

鎌田金蔵醸造の『王冠』は、後に大正二年の全道清酒品評会でも二等賞三〇点の中に入賞し、銅牌が授与された。



『緑爛』のこも包みと一升瓶、後に銘柄は『緑爛』に統一された

明治初年には一六軒もあつた酒類の醸造業者も許可制になつてからは五軒になり、その後は本間禮太郎、

鎌田金蔵の二軒になった。大正八年二二〇戸余りを焼失した浜町の大火以後は、新開町から現在の武道館のところに移転した。本 本間禮太郎だけが清酒醸造業を営んでいたが、昭和三年、余市酒造(株)に権利を譲渡した。これによつて、九〇年余りも続いた酒類の醸造業者は古平町から全く消えてしまった。翌年余市酒造(株)は北海道酒造(株)と改称したが、昭和三八年日本清酒(株)と合併した。

また、しょうゆの醸造も行われ、
寿原要太郎・鎌田金蔵の二戸で五二
二石、金額は一、〇二四円であつ
た。

みその醸造は鎌田金蔵二戸だけで
二三、二五キログラム、金額は二二
〇円であつた。

明治十六年度酒類課稅調	
地区名	濁酒 清酒
古平	一〇円 一七円
余市	一六 七
美国	六 七二
積丹	四 〇

吳服大賣出廣告

各柱並々御柱様蔭處候様而御座候間實以衆目高仕
淺きにも不揃御目繁衆に赴き候所なく各柱の御引立
と應く御程より上候所而者平衆の御要願に對ひても
記之當日より一層應儀に取費可仕候へを陸續御此衆
多少とも御周向被仰付度偏に幕者上候 敬白

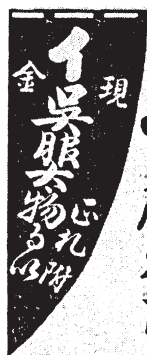
●來月廿三日開賣

當日小康景進呈可仕候

◎目下新奇流行品淨土取捨
置必主御意に叶ひ候様廉價
に相願可申候

古平郡新地所

廣谷商店



免許
五〇円
五〇五
五五
一五

合計

一三三
一三八

寿原醸造店の
醤油徳利 →

右
広谷商店チラシ →

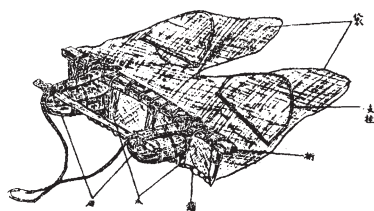
各種工業の盛衰

◆木タテ貝柱製造

明治以前にも海扇(ホタテ)を採取し、乾燥した貝柱をイリコなどと共に俵物(たわらもの)として長崎方面に送られていた。その後販路が途絶えていたが、明治二〇年頃から再び海扇(ホタテ)を採取し貝柱の製造が始まった。

古平橋の浜町側に工場があつたと
言われているが、次第にホタテの漁
獲が減り数年でその工場は閉鎖さ
れたようである。

明治二〇年代にオホーツク海沿岸でのホタテ漁が盛んになり、古平で使っていた八尺を持つて行つて採取したとも言われている。



↑ 八尺 磯舟を固定して手で引いていたが、のちに八尺を舟で引くようになった。

◆イリコ製造

明治一八年の北水協會報告書に「古平の海鼠(ナマコ)引き網」二十三とあり、その産額は明治以前から見ると減少の傾向にあった。

そして明治二七、八年の日清戦争
同三七、八年の日露戦争などによ
り海參(イリコ)の輸出が一時途絶
えたことから、それを製造する業
者も少なくなつた。

明治四二年、小樽港を經由して輸出した海參は一、二〇〇斤(七二〇キログラム)、価格は七八〇円であつた。
※ ナマコ・ウニやヒトデと同じ仲間

だが、外側の固い殻のようなものは退化した。形から西洋では「海のキウリ」と呼んでいる。昔から中華料理の食材として珍重されているが、近頃はまた人氣が高まつてきた。腸を塩辛にしたものが珍味コノワタで、昔は金と同じ重さで取引されたと言われている。ナマコを丸ごと煮て干したものがイリコ(海參)である。

イリコは早くからボタテの貝柱などと共に重要な輸出品であり、古平では日中戦争（後に太平洋戦争）の始まる頃まで僅かながら製造されていた。

大正十五年

〜続く

▼一〇月二六日

今日もまた雨降り、よく降ることだ。戸外の仕事は何も出来ない。明晩から亡母の命日なので、港町の姉も来られいろいろ相談する。コノさんも手伝いに来て団子の粉たたきなどやる。夜は熊さんと畳替えなどやる。

▼一〇月二七日

起床五時、戸外へ出て見ると一面の銀世界、一寸も積もっている。朝食前に仏事に供えるお花をとりに農園へ行く。まかなつていったが寒いこと、菊は雪のために枝が折れている。日中も雪が時々降り道路も悪い。

▼一〇月二八日

今日は亡母七回忌と亡きサキ十三回忌仏事を行なう。妻らは五時頃から起きていろいろと支度している。一〇時半から読経が始まる。招待一九人に僧侶が三人、一番膳と二番膳を出す。子供らも合わせて一四人が坐る。三時半、一同揃つて墓参する。時々雨の降る天気であつた。夜は後片付けどがなかなか忙しい。

港町の姉は泊りがけで手伝つてくれる。

▼一〇月二九日

今日は珍しく天気快晴、こんな天気はなかつたのでこも冬支度で忙しい。昨日の仏事の後始末も忙しい。午後から熊さん、天野さんはリングもぎをやると農園行く。何してもよい暖かい日で、こんな天気が四、五日続いてくれたらよいが。

高野名事作さんの日記から

当時の世相を見る

(127)

▼一〇月三〇日

今日はまた雨天だ、よく降ることだ。熊さん足が痛いと言つて休む、休むことのない人なのでよくよくのことだ。天野さん、薪割りに来てくれたが雨で仕事にならない。九月初めから約二か月中五〇日も雨が降るといふ。

▼一〇月三一日

起床六時、まだ電気がついてい

る。今日もミソレから雨になった。洗面早々に天長節で国旗を立てた。天野さんと菊地さん、午後から一号、四九号など板倉に入れたあつたのを担ぎ出してくれた。夕方からミソレと雪がまじつて降る。

▼十一月一日

今日は祝聖会例会、昨夜からの暴風なかなか止まぬ。海は時化している。五時半から読経が始まる。

のち新築の観音堂にて初めて観音

経をあげた。午後から天気も少し良くなったので、かねて話してある困畑から貰う松、モミジ、桜の木を見るべく田主人と行ったがずいぶんたくさん植えてある。家の農園を見回り夕方帰る。困からふくろく(福祿)ストープ2号、円筒など三〇円分買う。

▼十一月二日

今日もまた曇り空、時々雨が降

る、こんなに雨の降ることもないものだ。午後から雨が晴れたので農園ではリングもぎ、妻は大根抜きに行く。明日は消防演習なので新しく購入した自動車ポンプの試験運転をしている。数の子大暴落、古平で手持ちしているところでは大損害だ、七二、三円で買ったものが今は四十円、一本で三〇円からの損だ。私の家でも六〇円ぐらいで買ったものを四十円で売ることにした。バカらしいが仕方ない。

▼十一月三日

五時に起床したがこの頃の五時は真つ暗だ。五時半農園へ行くがまだ暗い。菊を掘り起こしていたら半鐘の音がする。今日は消防演習だ。ポツポツ雨が降り出したが間もなく晴れた。ダリヤを掘つたらイモが五、六株ついている、花を手折り帰つたのは九時。熊さん、菊池さん、天野さんがリングもぎに行く、一〇時頃から妻とソエさんも行く。午後から大雨になり少しも止まぬ。夕方農園から帰つて来たが、雨でケラを着てもぎ、三〇余カタもいだのでこれでほとんどいだ。カラスの心配

もなくなつた。

▼十一月四日

早朝浜に出てみたが珍しい上ナギ、海は静かで暖かい。珍しく朝から天気快晴、どこも秋始末で忙しい。一〇時頃、入舸から刺網の客が四人来て千六百間売。産地が下落したので安くした。農園の仕事もずいぶんはかどつたろう、私も裏のダリヤの根起しをやる。

▼十一月五日

昨日快晴だったので二、三日続くかと思つていたら、また雨になつた。倉の数の子も出たので片付けをする。沖村大謀からロープ取りに来て、五分二丸、七分と八分一丸ずつやる。夜、禅源寺の寺参りがあり、妻とトミ、四郎らが行くかねて④へ注文していたバラ、シヤクヤクの苗が小包で来たので農園へ植えねばならぬ。裏に植えた菊が咲いたので、手折つて花瓶に差し茶の間に飾る、菊の花は品があつて実に良い。明年は裏に本式に菊畑をこしらえねばならぬ。

▼十一月六日

起床六時、戸外を見れば一面の銀世界、昨夜寒い寒いと思つていたら急に冬か。本年は毎日の雨で

仕事ができないのにこの雪で実際困つた。この雪で寒いことコタツからストープが入用になつた。福禄ストープ五、六日前に買ったが、大工さんが来ないのでまだ据え付けていない。カレ網そろそろ支度にかかるので今日千間出た。

▼十一月七日

今日もはつきりせぬ天気、海は大時化だ。熊さんは農園からリノゴの運搬だ。大工さんが来てストープ取り付けるのに円筒の穴をあける。午後一時から禅学会があるので行く、一五、六名が集まつている。美国の新住職の説教があり、のち夜食が出て八時帰る。今日、種田銀作氏八一歳の高齢をもつて逝去された由、古平の成功者として、また勤儉力行の実行者として生きた手本であつた。惜しむべし。

▼十一月八日

昨日来の時化、今日はよほどナギてきた。曇り空で降りそうな天気だ。妻は平老母四十九日だとしてお参りに行く。去る五日から水産講習会があり、聞かに行きたいと思つているが今日まで行かれぬ。

▼十一月九日

今日は珍しく天気快晴。正治を連れて浜へ出て見る。上ナギで大謀の起し船が出ている。久しぶりの天気で外仕事に皆一生懸命だ。農園へ行つてひと働きするべく一〇時頃出かける。父は大工と共にふくろくストープを据え付けるのに、円筒の取り付けで忙しい。小菊もこの天気で赤、桃色などの花が咲いている。小菊もいいものだ。帰つて福禄ストープを初めて焚いたが暖かい。夜、種田銀作さんの通夜に行く。一三名の僧侶で施餓鬼がある。一代で巨万の富をなし勤儉力行、実に模範的な人物であつた。八時帰る。

▼十一月一〇日

今日も幸い好天気だ。朝食後自転車で困農園行き、霜が降り水たまりは氷が張っている。農園の晩秋の景色は良い。かねて頼んであつた桜とモミジ一本ずつを掘り起こして、ハイカラ山から五人で担ぎ荷車につける。私の農園に植えるのだがよい記念になる。九時から自転車で原田親類の葬式送りに行く。午後一時から学校で水産講習会があるので行く。四

時に終り、それから種田の通夜に行く。僧侶など二〇名、七時半に終り、③に寄つて話し帰る。③で某海産商から数の子を買入れ倉に入れておいたが、暴落と不良品をごまかしていたため飛んだ損害を受けたとのこと。実にこの頃の商人は悪化した、油断も隙もできぬ。

▼十一月二日

今日の天気、暖かさ再び初秋に戻つた。熊さんは自転車で沖村大謀、正大謀の集金に出かけた。今日は正治の満一歳の誕生日、ウドンに天ぷらの馳走で子供らは喜ぶ。種金の葬式送りに行く、僧侶が二〇名、送り人もたくさん居て古平でも例がない。昨夜の雨もすっかり晴れて好天気であつた。種金では、入船町の自宅から火葬場までの道路の悪いところに砂利を入れ、また奥の代りに質素だが駕籠をこしらえ、後で一般の人にも使わせるとのこと。どこまでも実用主義の人だ。この日は妹の命日であつたが寺が忙しいとのこと。で休んだが、私が夜仏前に読経供養した。今日、積丹半島鉄道が鉄道網の計画に編入されたと、澤

田代議士、小樽新聞社から役場に入電があつたとのこと。目出たことだ。

▼十一月二日

起床七時、天気快晴で、熊さんと天野さんは畑からリンゴを運んだり選別をする。私は倉庫を整理し、リンゴを入れる準備をする。かねて平田(刺網)二万間注文していたら、この暴落で八二五まで値引きした。後の注文は八円まで引くと言ってきたが、今日、七円七五銭まで引いてくれと電信と手紙を出した、何と言ってくるか。父は正午から畑方面の松井の辺りまで、畑や水田を見に行くと言つて出かけ五時に帰る。この頃は元気がよい。

▼十一月三日

起床六時半、天気快晴。九、一〇月中は毎日のように雨が降つていたが、この頃は割りと天気がよい。リンゴも倉に入れた。一号七、八〇〇斤、四九号四、五〇〇斤ほど、九号六〇〇斤、クズも入れて合計六千斤以上貯蔵した。私も一〇時頃農園へ行き、花苗植えやサクランボの枝切りなどやる。困から貰つた桜、モミジ本植えし

た。来年はよい花が咲くことだろう。大謀で小サバが獲れ始めたというが、どうかたくさん揚がつてもらいたいものだ。△仲谷さんへ五月に売つたイワシ網代、今日小樽から郵便為替で四〇〇円届いた。綿糸ますます安くなり、目下一六八円くらい。

▼十一月十四日

今晩三時頃から降り出した雪、起きて見れば一面の銀世界、全くの冬景色となつた。雪は少しの休みもなく降る。海も時化模様となり、夜に入つて吹雪きになつた。新聞によれば、天皇陛下にはかねて御不例のところ、よほど御重態にならせられ、摂政宮殿下は九州大演習行きを見合わせになられたとのこと。臣民として切に全快を祈る。綿糸暴落、メリヤス、木綿物下落のため、各呉服店では見切り売り出しで三割以上下落した。

▼十一月十五日

今日は祝聖会例会、昨日来の雪は休みなく一日中降る。五時起床、まだ真つ暗、洗面するのもなかなか冷たい。禅源寺通りの吉井角からは道路がなく、雪で長靴が

埋まり雪が入る。三番目であつた台所で三〇分も焚き火にあたり読経する。手の冷たいこと寒中のようにだ。八時に帰る。近いうちに雪だろうと思つていたが、まさか急にこんな大雪になるとは思つていなかった。皆冬囲いもしていないとこぼす。平田から手紙が来る。かねて契約の残り分の一万六千間を八円とする。外一万六千間だけ時価より一円安く六円五〇銭にするが如何、平均すると七円二五銭になると言ってきた。実に良い提案だが何分不景気のため貸し付けになる。いか返事したらよいか熟考するつもりだ。

▼十一月十六日

起床七時、今日も雪がチラチラ降り寒さも強い。熊さんは畑からゴボウ、ネギなど運搬するとしてツマゴを履いて二回も行く。私はゴボウや長イモなど選り分けたり、倉の片付けをする。呉服屋では見切り売出し中だ。綿糸の暴落で呉服類の安くなつたこと驚くほどだ。夜、熊さんのところへ天野さんと遊びに行く。

▼十一月十七日

今日も雪がチラチラ降り、軒か

らツララが下がっている。熊さんと天野さんは農園からリンゴを担いで運ぶが、日が短いので六回も運ぶと日が暮れる。倉庫内はリンゴでせまくなつてきたので、私はロープや網などを片付け整理する。平田から追加注文分は特に破格で勉強すると来たので、今日四種類注文した。夜、困支店へキングストープの焚き具合を見に行き、帰途傘に寄りいろいろ話し九時帰る。

▼十一月十八日

起床七時、相変わらず雪降り寒空だ。沖村大謀から品代七八〇余円入金する。この不況柄そんなに漁もないのに全部入金とはありがたい。熊さん早速銀行へ入金に行く。大謀からリンゴを買いに來て四〇〇斤売す。買いに來た若者と船頭さんにリンゴをやったら夜電話がきて、鮭を二尾やるから取りに來いとのこと。熊さんまたリンゴを持つて早速買いに行く。夜はトロロの馳走、四郎は悦三より三つも年下だがよく食べる。リンゴは一日に五、六個も平らげることが、それだけに体格もよい。どこも悪いところがなく至極壮健

なのは宝物だ。夜に入り寒風が吹く、この分だと根雪らしい。

▼十一月一九日

起床六時、この頃は夕方四時に電気がつき、朝七時に消える。ずいぶん日が短くなった。熊さんと天野さんは、午後から農園のリンゴの樹や植木園に行く。入舸葛西さんから刺網千間注文があり、八円四〇銭で売る。大いに売らねばならぬ。都合がつけば今月中に入舸から余別方面まで売りにいくつもりだ。

▼十一月二〇日

起床六時、この頃では早起き、熊さんが来て雪かき、私は板戸を開け、庭掃きや火鉢に火を入れる。湯内からタコ縄の道具類を買う客、入船町からはカネ網道具を買う客が来て、ポツポツ忙しくなる。私のつくった菊、玄関に置いてあるが元氣よく咲いている。

▼十一月二一日

起床六時、この頃では一番の早起きだ。洗面後板戸を開け、庭を掃き、火入れなどをやっている。一時間ほどしかかる。朝のいい運動だ。できるだけ早起きして、朝一時間ぐらいいは仕事をする。と朝

ご飯もおいしい、できるだけ続けた。農園も雪で仕事ができないので熊さんは店番している。私は今日、古平警察署落成式に招待され、九時半、困主人と出かけた。一万二千余円をもつて落成、場所もいい建物も立派なものだ。一時に式が始まり正午終る。のち酒肴が出て一時散会する。帰途司に寄り昼食を馳走され、二時半帰る。

▼十一月二二日

今日は六時、まだ薄暗いうちに起床した。雪が少しも降らぬ、板戸を開け、のち海岸を散歩し、新開町から畑方面を歩く。四〇分ほど運動して帰る。今日は寒さもゆるく青空が見える。九時頃、また正治をだつて浜へ出て見る、上ナギだ。小樽通いの勇丸、共栄丸が一〇余日ぶりで来て、△の浜で荷揚げしている。正治を座らせた小石を投げて喜んでゐる。静かな海の景色はいつ見てもいい。小林老母には一ヶ月前から針仕事に来てもらっているが今日帰る。八〇歳にならんとしている老人としては珍しく丈夫で、規律のよい人だ。夜、

△へ遊びに行き一〇時帰る。

▼十一月二三日

起床六時半、正治をだつて浜へ出て見る。海は上ナギ、漁船も皆出る。今日はこの頃にならない好天氣で暖かく、雪もダラダラ消える。佃田畑主人亡くなり、お悔やみに行く。

▼十一月二四日

朝の寒いことガリガリ凍っている。浜へ出て見ると上ナギ、今村の磯舟がハタハタ網を揚げている。ずいぶん掛かっている、ハタハタの初物を見た。ずうつと廻つて熊さんの家に寄る。ちようどストープを焚いていたので暖まる。今日はめずらしい上天氣、青空で太陽がカンカン照っている。妻はこの天氣で洗濯と張り物をする。裏に張り板を立てていると一〇月頃よりよく乾く。熊さん佃田畑へ手伝いに行く。今日は旧三〇日のえびす講の吉日で、夜にトロロの馳走がある。えびす講は商人の祝すべき吉日だ。今日は刺網六〇〇間、タラ縄二〇余円、代金計八〇余円現金で売れた。えびす講にこの頃では一番の売上げで縁起がよい。神棚にご馳走を供えて前途の幸

を祈った。夜、佃田畑老人の通夜に行き七時半帰る。のち例のおおりお経をあげた。

▼十一月二五日

起床六時、板戸を開けるやら朝の支度で三〇分ばかり、のち外套、長靴で農園へ行く。四辺雪に覆われ、夏や秋のような景色はない。一尺ほど積もり寒さもきびしい。菊も皆雪の下になつてしまつた。明年からは氣をつけて早く取らねばならぬ。今日も天氣は快晴、洗濯物はよく干せる。佃田畑の葬式で妻が送りに行く。天皇陛下この頃御容態が思わしからず、御用邸は混雑しているとのこと。各地青年団などでは全快祈願をするところもあるという。

▼十一月二六日

昨夜より雨が降り暖氣になる。雪の消えること、ところによつては土が出ている。私は五、六日前から風邪氣味で床にっている。

(続く)

塩谷ゴロダの丘にて

大 澤 文 子

つめたい五月の風は李の若葉を
そよがせ、ゴロダの丘みにちに白
い花びらを散らせていた。

ああ！今日は五月二十三日、
『伊藤整文学碑』の除幕式の日だ。
私は古平町短歌会の会員たちと
共に塩谷ゴロダの丘の細道を足
早に会場へと急ぐのだった。早く
も丘の一角に整えられた会場に
は、海鳴主宰北見恂吉先生はじめ、
各名士の方々が多数見えら
れ、開会の刻を今や遅しと待ち
かねておいでだったのだ。会場の
中央には見上げるばかりの丈高
い碑が見え、白い被いがありなし
の風に揺らいでいた。

やがて十一時…開会の挨拶に
続き神主さんによる修祓があり、
ついでご遺族の手により除幕が
行われた。音もなく白い被いが
引かれ、見る間にベージュ色の安

山岩が現れた。あつ！思わず
もるる溜め息、美しくデザイン
された碑面には北見恂吉先生の
『伊藤整文学碑』の文字が浮かび
あがるがに目に入つた。あつ思わ
ず声にならぬ叫び声をあげた。
その下辺には『海の捨指』と題さ
れた伊藤整氏の詩の一節が北見
先生の手により刻まれていた。

『私は白く崩れる波の穂を越
えて漂っている捨指だ』

その文字が浮かびあがるように
光り輝いていた。驚きの声を放
つ一同だったが声にはならず、
ただただ涙ぐむのみだった。

会場にはおそかに『幻想曲』
の調が、ゴロダの丘の樹立ちを
縫い悲しく流れてゆくのだった。
さやくような『幻想曲』の中に
北見恂吉先生のご挨拶は続く。
ある時は悲しく…ある時はさ

さやく如く…胸がしめつけら
れるように痛い、だれひとり面
をあげるものもない。

貞子未亡人の細い肩がかすか
に揺れ歌びとたちのすすり泣
く声。

「ある時は君なしと思ひある時
は…」止むことなく『幻想曲』
の調へは続く。

こゝ塩谷ゴロダの丘より遠く
積丹岳がかすんで見えるが、今
日は潮騒の音もない。冷たい風
が時折り頬にふれる。

児童らの手により一斉に放た
れた色とりどりの風船！美し
く空高くどこまでも、広がる海
の涯までも届けよ…と、舞いあ
がりゆく風船に拍手の音は止
むこともない。何か胸がしめつ
けられるように痛い。

貞子未亡人の美しい後姿にふと
臉をよじる。

この静寂なひとときを破り、
なんの鳥か、けたたましく鳴き
樹立ちの中を飛びゆく羽音！
ふと、折にふれ北見恂吉先生
より伺っていた伊藤整氏のこと

どもをこの夜静かに思い出した。
1生い立ちのこと…はにかみや
だった少年の頃のことどもをふ
つふつと思ひ、何か暖かいものが
心の中を通り過ぎてゆく思いが
した。

最後にゴロダの丘にて開催さ
れた伊藤整文学碑除幕式以来
終始心を慰めてくれた『幻想
曲』の調へにふれてみよう…。

この曲の作曲者は北見恂吉先
生の四男でいらつしやる音楽家
鈴木史郎氏です。

・国遠くひとり思ふ今は亡き
きみと知りつただ会ひたかり
・ある時は君亡しと思ひまたいつ
か尋ねてくる思ひしてをり
鈴木史郎氏の『幻想曲』の原点と
なつたと思われる、北見恂吉先
生の短歌二首をあげてみた。

私はこの夜、幾度も弾いてみた
あの頃のことを思い、北見先生に
戴いた楽譜を手にとっていた…。

× × ×

この物語は昭和四十五年（一九
七〇）五月二十三日の想い出をか
いてみました。

S 町内の学校探訪 S

古平小学校

◆教育所の費用

明治九年、古平教育所の費用については次のようであり、開拓から古平郡に下付された費用の六割六分に当たる金額である。

内 訳

金八十四円 教師大岡良周給金

(一ヶ月七円)

金三十円 教育所小破修繕費

金十八円 薪十八數分、

一敷一円

金九円六十銭 木炭四十八俵、

一俵四十銭

金一円五十銭 油一斗八升分、

一升につき八錢三厘

金三円 半紙十二束分、

一束につき二十五銭

金一円五十銭 墨代、筆十五本、

一本につき七錢、墨三丁、

一丁につき十五錢

金二円四十銭 附木、灯心、

兩便所掃除代、その他

この年十一月、大試験が行われ、成績と合格者が発表され、成績の良い者には賞として教科書が授与されたとあるが、大試験というのがどのようなものであったのかは不明である。

明治一〇年、後志管内を視察した、札幌本庁学務局の三吉笑吾の『管内教育状況報告書』に、

「古平郡民は公立病院を設けるために、その設立前すでにその費用の用意をしている。学校建設についても戸長は、熟考している

ところだが、機を見て着手すると答えている。これであれば開校までに費用を貸し付けておいてもいいのではないか。…」

とあり、学校建設についても募金などによりその準備を進めていたと考えられる。

◆浜中学校創立

明治一一年、児童数も増加して、仮校舎ですでに授業が出来ない状況になり、校舎を新築することになったが、これまでの寄付金が四千円にも達していた。しかし、校舎を新築する適当な場所が見つからず、浜中第一番地の官有地を候補地として、開拓使に次のような内容の申請書を提出した。

「古平郡浜中学校のこと、明治九年に校舎を新築し、当初は生徒も寡少でしたが年々入学者が増加し、目下入校にも差し支える状況です。関係者により協議しましたが、ほかに便宜な土地を選び、新築した方がよいということになり、その経費を募金する有志を募りましたところ、およそ金四千円程になりました。つきましては校地として旧官舎の建っていた浜

中村第一番地は郡の中央でもあり、通学にも最も便宜のよい場所として、お払い下げ願いたいと考えております。地代金につきましては今すぐには難渋いたしますが、追つて相当の代価を納入いたしますので、しばらくは建物、土地を拝借し、この願いご裁可のときには地均しに着手し、早速校舎建築に取り掛かります。このこと郡民一般に代わり懇願いたします。

明治十一年七月三日

浜中学校教員

佐久間有三 印

古平郡戸長

宮崎 彦八 印

第五大区区长

出羽佐太郎 印

開拓使大書記官

堀 基殿

この申請書に小樽分署三等属北川誠一は、申請のあった場所は官にとつて必要な場所でもなく、学校用地として適当な場所であり、郡民の気合がこもっており、不都合なことも考えられないので至急に判断し、また建築落成の上は詳細を報告するようにと、伺いをしている。

◆教育令と学校総規則

政府は明治五年に布告した学制を廃止し、明治一二年九月、新しく教育令と学校総規則を布告した。教育令の小学校に關係する条文は、

第二条 学校は小学校、中学校、大学校、師範学校、専門学校、その他とする

第三条 小学校は普通の教育を児童に授ける所で、その学科を讀書・習字・算術・地理・歴史・修身等の初歩とする。土地の状況によつて図画・唱歌・体操等を加え、また物理・生理・博物等の大意を加える。殊に女子のためには裁縫等の科を設けること

第九条 各地方では町村ごと、または数町村が連合して公立小学校を設置すること

第十条 町村内の学校事務を管理させるため学務委員を置くこと

第十一条 学務委員はその町村の選挙によること

第十三条 児童は六年より十四年までの八カ年を学齢とする

第四十二条 学校では男女の教室

を同じにしてはいけない。但し小学校ではこれによらなくてもよい

第四十六条 学校においては生徒に体罰を加えてはならない

第四十七条 生徒試験のときに父母や後見人が学校に來觀してもかまわない

この教育令が出たのは、浜中学校建築の計画中のことであつた。

新しい教育令は出たものの、直ちに全国で実施出来るものではなかつた。特に北海道ではようやく開拓が始まつたばかりであり、集落の人口も少なく、経済的にも家族がそれぞれ働いてやつとの生活というのが実態であつた。

開拓使は、北海道については植民地に即した教育を行うという方針の下で、明治一三年一月、小学校則を次のように改正し実施することになった。

▼小学校則

就学 課程を六級(六学年)とし、それをそれぞれ前、後期の二期に分け、一期は六ヶ月間とする。修身・養生談・読本・作文・習字・算術・体操等を授け、毎学期の終わりに定期試験を行い、合格した者を昇級させる。

▼変則小学校則

就学 父兄の營業を助け、長く學業につけない者のために、滿六年以上の者を四カ年間に卒業させる。学科課程は八級とし、毎級六ヶ月間の終業とし、読本・算術・習字・体操を課す

浜中学校は当初、変則小学校則による授業を行うことになった。

◆浜中学校竣工

明治一三年、待望の新校舎が竣工した。中央が二階建てで白ペンキ塗りのモダンな校舎であつた。校地一、七四〇平方メートルのところに、四八五平方メートルの校舎がほぼ西向きに建設された。その場所は現在の役場裏側の辺りであつた。やや不鮮明だが貴重な写真が一枚だけ残つていて、当時の鍊景氣の恩恵から財力が比較的豊かであつたことがうかがわれる。

浜中学校の建設についてはひとつのエピソードが伝えられている。

学校の建築用木材が余市港から輸送の途中、荒天に遭つて流失してしまつたことから、港町幾井旧七が住宅を建築するために購入していた木材を急遽、学校の用

材にまわしてもらい、それで建築したものであつた。幾井家は当時廻船問屋のほか手広く營業していたが、現存する住宅は明治一三年建築に着手し、翌一四年竣工したものである。

(新築落成した浜中学校の写真は次号に掲載)

学校建設に当たつては郡内から多くの寄付が集まり、五二八人の寄付者に対して開拓使から褒状が与えられた。また高額の寄付者には銀盃と真綿、一五円以上の寄付者には木盃と麻苧が与えられた。

当初、学校教員は五名が任命され、この年から学校教員の資格を得た者は訓導と改められ、等級による月俸が定められた。

◆修業年限と学力試験

変則小学校則による学校の修業年限は四カ年であり、これを八級に分け、さらに前期、後期とし、初等科を卒業して進学を希望する者は予科二級に進むことができた。入学希望者は次のように入校願を提出し、許可を得て入校した。

II 膳箸(いぜんぼし)の船印

岡田家の繁栄と 北前船と古平

古平と岡田家

明治以前の古平のことに
ついては、現在ではその名は絶
えているが、岡田家の事跡を調
べることによってその歴史を知
ることができよう。

岡田家は実に二百年以上にわ
たつて古平場所を請負い、後の
古平の発展に大きな影響を与え
てきた。北海道には八〇か所ほ
どの請負場所があったが、これ
ほど長期間にわたつて請負いを
継続していたところは外には無
い。

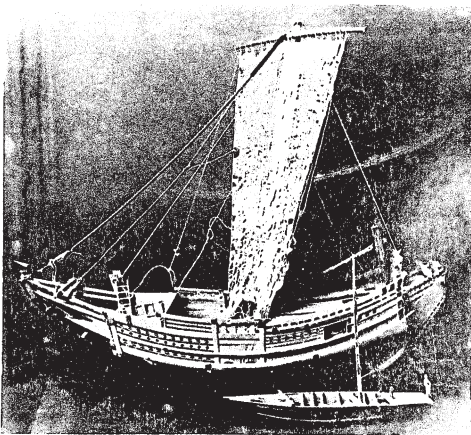
慶長年間(一五九六〜一六一
四)に当時、蝦夷地と呼ばれて
いた頃から商売を拡大するため
北海道に渡り、慶応二年(一八
六六)請負場所廃止によつて古

平を離れるまで、初代弥三右衛
門玄秀から二一代八十治(八十
次とも書く)までが古平との深
いかかわりを持っていた。

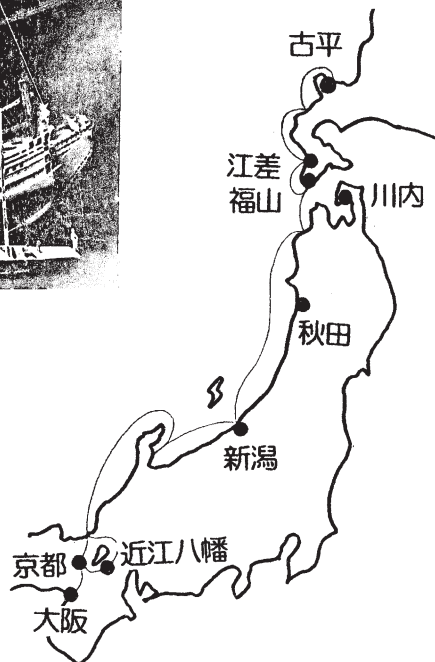
岡田家の郷里でもある近江八
幡市では、蝦夷地に進出し成功
を収めた商人たちの遺構が保全
され、その事跡は広く知らされ
ている。以前、この地域で発行
されていた『太湖』という新聞
にはそれらの事跡が紹介されて
いて、岡田家について知るひと
つの資料となっている。

岡田家の起こり

天正四年(一五七六)、織
田信長は天下統一を目前にして
安土に広大な城を築き、名も無
い小さな農村安土は城下町とし
て一躍隆盛を見ることになった。



古平～近江八幡 の略地図



こうした新興地に、九歳の岡田
弥三右衛門は父母と共に移住し
て来た。そして彼が一五歳にな
つた天正一〇年(一五八二)、本
能寺の変が起きると安土は急速
にさびれていった。

天正一四年(一五八六)、豊臣
秀次が近くの八幡山に築城し新

市街(八幡町)が出来ると、また
一家を挙げてそこへ移住し小さ
な店を開いた。近江国蒲生郡八
幡為心町のこのささやかな店が、
後の岡田家代々の本拠となつた
のである。しかしこの地も関白
秀次の没落と共に衰退していっ
た。時に弥三右衛門(後に玄秀)

↑岡田家を持っていたムシロ
帆の来た前船

は二九歳であった。

彼は店に売れ残った呉服反物
類を背負い、東北地方に向けて
行商の旅に出た。そして三〇歳
の頃、ついに南部の地に足を踏
み入れ川内(下北郡川内村)に
到達した。ここで彼は大きな将

来への転機を迎えたのである。

この地を根拠として行商を行っている内に、郷里では夢の話として聞かされていた蝦夷地が、海峡の遙か彼方に望見することができ、時折り川内港には蝦夷地からの産物が便船で輸送されて来ていた。氣鋭で商売に熱心な彼はこれを見逃さず、早速、便船に商品を託して販売を試みたのである。

蝦夷地に雄飛する

何回か商品を蝦夷地に送り注意深くその推移を見守っていたが、蝦夷地との商売がすこぶる有望であることを確かめると決然として海峡を越え、松前城下の福山(松前町)へと進出した。ちょうど蝦夷地福山の五代藩主松前慶広は秀吉の亡き後、徳川家康から蝦夷地の藩主として認められたばかりの時であった。この頃は先住民のアイヌとの争いもようやく一段落していたが、辺地の小藩の城下町である福山は人口がようやく一千人を超えた程度で、一軒の宿屋さえもないという状況であった。宿舎にも困惑していたが、幸い藩士

である工藤平左衛門方に宿を借りることができ、不便な中で持ってきた商品を売り捌いた。

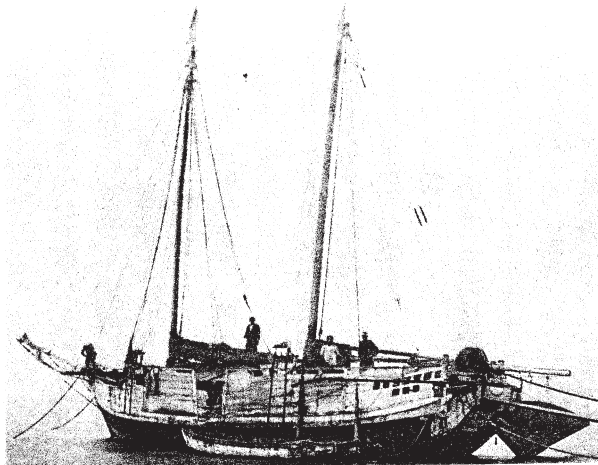
しかし、何分にも辺地でのこと、貨幣の流通は全くなくすべて物々交換であった。それで販売の代価として得た蝦夷地の物品を最も有効に処分するには、自分で船を持って本州に輸送することであった。

彼がどのようにして蝦夷地の産物を京阪神地方へ運び、またそこからの物品をどのようにして福山に運んで来たのかは不明だが、この頃から蝦夷地を目指して入り込んで来た近江商人たちの中から次第に頭角を現し始めた。ついには止宿していた工藤平左衛門の推挙によって藩主や藩士への調進方となり、その並々ならぬ商才と試練によって福山に支店を設けるようになり、蝦夷地で厳然たる地位を築くに至ったのであった。

止まることを知らぬ彼の商魂はますます燃えて、藩主や家臣に生活必需品を納めるようになり、時には金銭を融通して、その精算には藩主の領地や藩士の

知行場所で生産される産物を引き受けて本州で販売し、さらに大きな利益を上げた。

明治一〇年代、本陣の浜に
←接岸している北前船



知行場所を請負う

藩主もまた家臣と同じように自分の領地を持つていて

(直領)、そこから生産される産物売ることによって自分の収入としていた。藩士も自分の知行場所での交易によつて得た産物を商人に売って収入を得てい

たが、しよせんは武士の商法で、品物の売買などは武士にとつては不慣れなことであり、またそれは煩雑でもあった。

そこで考えついたことは場所の権利金のようなものを取つて、産物の売買に関する一切は商人に任せ、自分たちは安定した収入で生活をする——ということであった。

また一方、商人の側から見れば、自分の才覚によつてはまだまだ大きな利益が得られるという思い入れがあり、財力のある商人たちはそれに応じた。このような仕組みが「場所請負制」である。

古平場所の知行主は新井田喜内と言われ、岡田家が場所を請負ったという記録のあるのは、享保年間(一七一六〜一七三三)五代目弥三右衛門秀悦からであるが、別の記録によると「石狩、厚田、浜益、古平、美国、積丹各漁場は宝永三年(一七〇六)始めて請負人あり」と書かれていて、この年に岡田家が場所を請負ったとすれば、それは四代目弥三右衛門玄正のときである。



二病のお陰で

葛 西 庸 三



六年前から私は、妻と自分の蒲団の上げ下ろしをし、食事の時は手助けをするようになった。洗濯も自分でできるものはやる。少しでも妻の負担を軽くしたいと思う。

最初の頃は、妻の敷布の皺を伸ばしながら、これは女房の仕事ではないのか、なんで俺がこんなことを、と心が疼くことがあった。今はそんな思いは全くない。極く自然体でやっている。

振り返ってみると結婚してから七十歳近くまで、私は仕事一筋だった。

家や子どものことは一切妻任せで、家計がどうなっているのか、預金があるのかどうかなど、無関心だった。終の栖の設計や工事の交渉も妻だった。

私は居候で我がまま、その上、タンパラときている。困った男であ

った。

そんな私が少しずつ変ったのは、平成十三年四月に、前立腺癌と診断されて治療に入り、それまで境界型だった糖尿病が癌治療の副作用で急激に悪化し、こうとうインスリンを打つ羽目になってからだ。

前立腺癌では余命十年、五十％と言われ、糖尿病は余病の併発を警告された。

その時、何としても生きたいと思った。まだやり残している仕事がある。ライフワークはやつと資料集めのメドがついただけで、これからが本番なのだ。

一念発起してタバコを止め、徹底して食事療法と運動療法に専念した。

インスリンは食事の十分前に打つ。注射を終えて居間へ下りる。食事の用意ができていない時がある。

カロリイ計算をしてバランスのとれた食事づくりに苦労している妻の姿も解らず、どうしたんだ、と怒声が出る。

食後は、朝と昼は三キロ、夜は四キロ歩き汗を絞ります。

夜は妻が付いてくる。雨の日は私に傘を差し、雪の夜は先に歩いて道をつける。

生きたい一心で歩いていた時は、妻の行為に無関心、満開の桜も眼に入らず、雲雀の声にも馬耳東風だった。

半年、一年が過ぎ、徐々に体重が減り、血糖値が安定して遂にインスリンを廃棄した。同時に前立腺癌マアカも平常値となり、医者から当面の心配がなくなった、と告げられた。

現金なもので、その言葉を聞いた途端、安堵の血が体中に流れ、気持ちが一挙に解きほぐれた。

急に心に余裕が生まれ今まで無関心だった秋空の雲や、紅葉の輝きが眼に染みて、生き返ったような気持ちになった。

すると、澄んだ心の中に、これまでの色々なできごとが一挙に蘇る。

バランスのとれた食事づくりに苦労し、深い雪をかき分けて道を作った妻の姿が、臉の中に熱く浮き出ってくる。

イライラして文句を言ったことは何度もあった。しかし愚痴一つ言わずに、病氣と闘う私を支え、陰になり日向になつて尽くしてくれた妻……。ああ、本当に苦労をかけたなあ、と心が目覚めた。

私は健康を回復する道程で、妻の優しさと有難さを全身で感じるようになった。

気付くのが遅かった、と思うが、今からでも遅くはない。気付いた時が出発だ。

これまでの妻の優しさと苦労をしつかり胸に刻み込み、今度は俺が優しくなる番だ、と自分に言い聞かせた。

だからそれ以来、時にはタンパラが出る時もあるが、しかし心の中で手を合わせ、有難うと口遊みながら、妻の蒲団を丁寧に敷けるのである。

二病のお陰で妻の優しさが解った私は、やつと妻に優しくなれる自分を発見した。

澄みわたった秋空——というより肌寒さを覚える秋ですが、九月二十七日は伝統的な年間行事でもある十五夜です。二十七日の夜が十五夜？ というのもへんですが、これも暦のいたずらで、旧暦と言っている暦では十五日の夜には間違いなく満月が見られます。

満月が見られるまでにはいろいろと月の形が変わりますが、三日月を見ますと春と秋では違つて見えませんが上に、秋には立つていて欠けたところが左側に見えます。これは季節によつて太陽の動きが変わることにあります。

月は昔から人々を不安にさせる恐ろしい闇夜を照らし、夜ごとに変化する月の形と穏やかな光は、人の心を安んじさせ和ませてきました。教科書にも出てくる兼好法師は、「秋の月は限りなくめでたきものなり」と言っています。

季節をいう言葉に初秋・仲秋・晩秋とありますが、八月十五日(旧暦は秋の半ば、この夜の月は仲秋の名月として月を観賞するには最もよい夜とされています。

仲秋の名月というのは中国の伝統

が伝わってきたものですが、日本では十三夜・満月を待つということから待月と言つて、この日に月見をするという習慣が生まれました。

月の満ち欠けが暦の基礎になっていたことと、月の満ち欠けが大自然の動きとして、人の運命にもかかわつていふと信じられていたこともあつたでしょうが、秋の収穫に感謝するという願ひもあつたようです。

それで人々は月見のお供え物として昔から、その土地によつて多少は

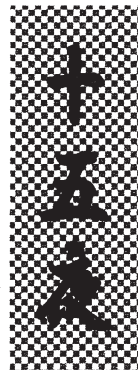
季節の民間行事

変わるもののハギ、ススキ、キクの花、オミナエシを飾り、里芋・枝豆・栗・柿・とうきび、だんごなど季節のものを供えますが、魚などのなま物は供えません。このような行事が始まつた頃は、人が集まつては酒を飲み食べ賑やかな集まりでした。

道南(江差周辺)地方では、月見のだんごを棒で突いて取り、取られた家では縁起がいいといつて喜ぶ風習があるようですが、古平では全く聞いたことがありません。

古平では、それぞれの家庭で外に面した場所に思い思いの飾り付けをし、季節の変わり目でもある伝統行事を守っていました。子供たちにとつてはあとでお供え物を食べるのが楽しみでもあつたようです。

地域によつて泥の木方面の人たちは、秋の十三夜・十五夜・二十三夜には日頃の農作業の無事や豊作を祈り、収穫終つた後は感謝のお祝いを恵比須神社で開いたそうですが、この日の主役は女の人たちでした。



最近月についての興味や関心は別なところへ移つたようです。それは科学の進歩にともなつて、月がぐつと身近なものになつてきたからです。その立役者は月ロケットです。

月から見た地球の姿を見ることができ、その明るさは、地球から見た満月のときの八十倍も明るかつたとか。また、月はいつも同じ面を地球に向け回つていふため、地球からは絶対に見ることが出来なかつた月の裏側も、月ロケットがそれを見せて

くれました。特に変わったところは無かつたようですが...

ところが今月一四日、日本の基地から月の周りを回る衛星「かぐや」が打ち上げられました。本格的な月の探査はアメリカのアポロ計画以来のことと、日本の宇宙科学の技術が世界に認められる快挙です。

「かぐや」の任務は、学者の間でいろいろと意見のある、「月はどうして出来たのか」ということを解明する手がかりをつかむことにあります。

また、この衛星にはNHKが開発した高性能のビデオカメラが積み込まれていて、月の様子や月から見た宇宙のより鮮明な画像が送られて来るとのことです。これを機会に月や宇宙の興味や関心がいつそう高まることを期待されます。



→ 月見だんごをつくる (江戸時代)

景月

瀧 内 優 子

したたかな音に青葉を打つ驟雨夏のひびきを暫らくたつる
音たてて降り出づる雨忽ちに坂なす舗道に沿ひて流るる
高きより見れば大きくカーブなし古平川はきらめきて照る
何の鳥か照る日の方へ飛び立ちて天の微塵となりて紛るる
ひたすらに頼まむ信を持たぬ身が盆近くして仏具を磨く

墓を守るごとたむして鴉らは供物さらへば影低く飛ぶ
立ち並ぶ墓に小雨降り過ぎて饅ゆる匂いを供物は放つ
ふき立ちて一筋高き噴水をめぐる水面にみず音さわぐ
水の面に止まざる音を聞きあつつなごみ来るなり噴水広場
ふき上り噴き上り空に届かざる噴水に還る己の挫折

◆◆編集後記◆◆

▽『せたかむい』についていろいろとお話をお聞きすることがありますが、高野名幸作日記のことが話題になります。

「私が生まれた頃のことを想像されます」、また「子どもの頃のことをうつすらと覚えていますが、あんなことがあったんですね」と、どなたも過去の懐かしい思い出がよみがえってくるようです。

この日記は大正四年から昭和三十八年までの分がまとまっていて、それ以前のもの一冊あり、欠けているのは数年分です。毎号四ページにわたって二ヶ月分ほどを紹介しておりますが、現在、ようやく大正十五年十一月まできたところです。この先はまだ延々と続きます。「先を早く読みたい」と待ちわびておられる方も多いようですので、来月から一ページ増やして五ページにしたいと考えております。また、時々原文も紹介しておりますが、それに興味をもたれる方もおられるようですので、一月号でも増ページしてご要望に沿いたいと思います。

▽先日日の北海道新聞に「古平漁港で大漁？」という見出しに思わず「えっ!」という感じでしたが、その正体は、埠頭で小サバとチカを数だけは三桁も釣ったという記事でした。何でも札幌から来た親子連れで、この頃になると釣れ出すので今年も来てみたら思いがけない大漁! で大喜びだったとか。

それから二、三日後の夕方、埠頭をずうと通って見たら何人かがチカを釣っていました。チカも小さかったのですが、何匹か釣った小サバを見たから小指ほどの体長で、よくもまあ針に引つ掛かったもんだと思うような大きさでした。これなら百匹釣ったところで両手ですくったくらいの量かな? いいとこ佃煮用といったところでしょうか。

▽NHKテレビで月々金曜日まで、午前十一時五分から『ほっからんど北海道』という番組があり、金曜日には道内の市町村が紹介されています。番組の中で時間は十五分ほどですが、月末に古平町を紹介するための収録が行われます。内容や放送の日程は未定ですが、古平町のどんな魅力が演出されるかご期待ください。

悠

雜詠 〔八月号〕

主宰 水見壽男

月朧海鳴り遠く磯に聴く

越野清治

源流の微かな音に風光る

朧なる沢の水音までおぼろ

真青なる一帆の海風光る

雲飛んで仔馬が跳んで牧広し

話し声うらうらの垣根越し

文焼くやあの日あの夜も朧月

水音の木の間がくれや風光る

しなやかに風の意のまま雪柳

朧月はるか漁火眇々と

奴風ほどよき風に乗つてをり

山桜一樹の色の鮮やかに

一湾の海猫に鳥に風光る

うららかに庭木の目覚め促しぬ

囀りの日増しに濃しと深呼吸

バス待つ娘さりげなく持つ春日傘

山ひだの遠くに消ゆる春の雲

山口悦子

越野敏雄

高橋重子

威勢よく捌き鮮やか初鱈

外山俊久

音がして砂滑り行く春の波

耕せば畑は確かな土の音

中空に遊ぶ夕雲春の暮

堀典子

春空に絹のやうなる昼の月

春の月下ゆく雲を流しをり

喚声のあるごと連翹炎えあがる

海胆を突く簞を揺さぶる岳風

本間寿昭

春潮の匂ひ棲みつく荒れ岬

船下し風の芯まで春匂ふ

海胆を剥く指に技ある浜女

【句評】

渡辺嘉之

花びらを重ねて風の吹きだまる

おぼろ夜のどこかが軋む舳ひ船

春の夜の空曖昧に仄かなり

春風の刻んで行きし波の綺羅

室谷弘子

百選の渚打ち来る波おぼろ

潮鳴りの日毎に失せて春深む

風紋も波紋も寄せず春の海

春暁の逆光あびし漁り船



【二五】

— 八月号 —

幼顔残りし友や夏衣

下萌えて北の大地が動き出す
外山 俊久

継続は力なり海風薫る
越野 清治

散歩道木洩れ日揺れて初音聴く

夏霞近き山脈突き放す
堀 典子

裏山の萬緑の息深く吸ふ
斉藤 波留

緑陰に地図を見てゐる二人かな

岩つばめ海面すれすれ翻る
本間 寿昭

青鳶や隣は日がな畑仕事
山口 悦子

乱鶯の声上り行く狭の空
鮎走る狭の瀬形漁近し

伝へ聞き甘き苺の畑を訪ふ
渡辺 嘉之

羊蹄山の茂る麓の風匂ふ
越野 敏雄

書架越しに見えて森閑夏木立
郭公の声に風音止みにけり

萬緑やはつぴ姿の運河街
室谷 弘子

笹の子のまづは笹の子飯を炊く
大和田 絵伊

海原に色を委ねし晩夏光
大海に消ゆるほかなき五月雨

万緑を背に凜として古刹あり
仲谷 比呂古

山道を越え萬緑にまみえけり
高橋 重子

日を呼んで溪動きたる若葉風
春の雷この世の音と思はざる

短歌

古平岬短歌会

海見ゆるわが町の温泉に浸りつつ漁も言ひ合ふ女らの親し

池田 テル

夕暮れに子の待つ山に急ぐカラス一点を見つめ離れずに行く

金子 寿子

鳴子らん陽ざしの中に群生し白の花房微風に揺れ

坂本 信子

入院し未だ帰らぬ友の庭に咲く八重桜いつものやうに

鈴木 木時子

久々に母の好みしガーベラを供へて想ふ短き命を

田中 香苗

山菜と花苗につどふ道の駅見上ぐ鴨居に燕の巢ありて

丹後 初江

突然逝きし悲しさはまだ信じられずもう早や百か日過ぎぬ

寺田 カツ子

屋形のハウス幾重にも成り腰を折り野良を行く人を窓越に見る

仲谷 喜美能

一キロ程歩くを日課とつとめつつ呆けず元氣な余生をねがふ

東 美知

川のぼる河口の潮は見えざれど橋のあたりにさざ波の見ゆ

堀 典子

俳句

古平俳句会

白鷺の翔つ羽音にも初夏の風

越野 清治

らんまんの花に浮き立つ正隆寺

斉藤 波留

六月の風の誘ふバスの旅

山口 悦子

岩燕ブルーの海をほしひまま

越野 敏雄

五月好き朝の空気の旨かりし

大和田 絵伊

岬まで道は一本草茂る

高橋 重子

春灯や静かに流る童歌

外山 俊久

はみだした感情の波青嵐

堀 典子

郭公は遠く聞くもの野良仕事

本間 寿昭

植田早風のとりことなつてをり

渡辺 嘉之

晩夏光差したる岬の波荒ぶ

室谷 弘子

夏霞地球すつぽり隠れたる

仲谷 比呂古

古平町史年表

昭和32年 (1957) ～続き

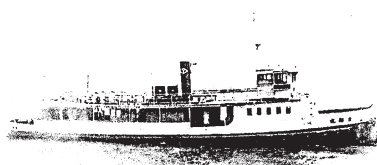
- 10/ー：古平小学校が校舎の耐久性測定の結果老朽校舎に指定され、改築の要望が高まる
(旧校舎は明治38年・大正11年に増築)
- 同：余市～美国間を冬期間もバスが運行し、定期船の乗客が減って定期航路が廃止される
- 11/17：稲作農家の慰労と収穫感謝祭が恵比須神社で行なわれ、役場会議室で祝宴が開かれる
- 11/24：稲倉石小中学校PTAが、ピアノ購入資金造成のため映画会とバザーを開く
- 11/28：小樽底引き船が雄冬沖で遭難し、乗組員で古平町出身の堀・細野の2名が死亡する
- 11/ー：港町地区の海岸護岸工事が完成する

昭和33年 (1958)

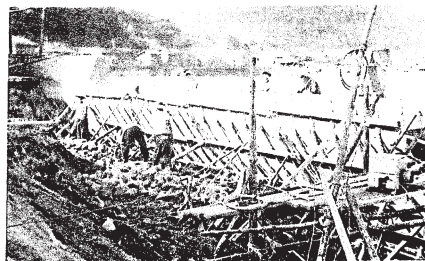
- 1/7：大時化でスケソ刺網の3分の1が流され、損害額は500万円といわれる
- 1/10：佐々木運輸のトラックが猛吹雪の中、古平橋から転落したが幸い下が砂地のため運転手は軽傷ですんだ
- 2/9：古平町議会議長本間権平が死去し、禅源寺で町議会葬が行われる
- 3/15：古平砂利工業(株)が設立される
- 4/8：稚内根拠地として操業していた鯨沖刺網漁船第五勝栄丸が転覆沈没し、乗組員9名全員が行方不明となる
- 4/24：浜町男沢さん前の道路にヘリコプターが着陸し、珍しいので大勢が見物に集まる
- 4/27：古平町長選挙で、現職の伊藤由松が圧倒的な得票で対立候補を破り3選を果たす
伊藤由松 2,850票、小田俊与 215票



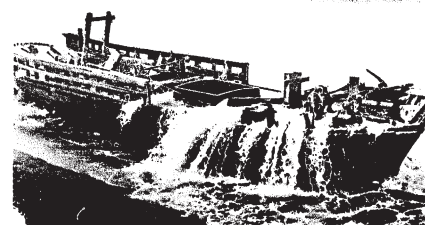
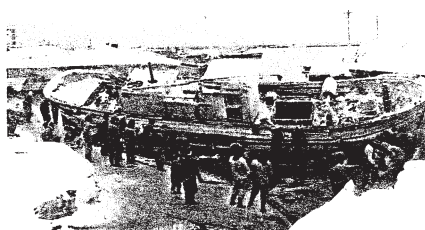
↑ 校舎が老朽化し運動場の天窓をムシロで覆う



↑ 最後の定期船〈金勝丸〉



↑ 港町の護岸工事



↑ 暴風雪で大破した漁船